

米原万里



読書日記

戦争と学校秀才

上野千鶴子と小巖英二が鶴見俊輔にその戦中体験を聞き出す「戦争が遺したもの」

(新曜社) がすごく面白い。肩の力を抜いてスルスル読み進めるのに信じられないくらい密度の濃い内容なのだ。

アメリカに留学中アナーキズム本を読んでいたため留置場に入れられたとき、便器の上で書いた卒論がハーバード大の教授会で通って卒業できた話とか、日本の敗戦は分かっていたが、「負けるときに、負ける側にいたい」「勝つ側にいたくない」という思いで、交換船で帰国した日本で徴兵され、配属されたジャフで士官慰安婦の調達をさせられた話とか、無数に散りばめられた印象的なエピソードに爆笑し呆れ返りながら、日本と日本人について生き生きと感じ考え続けてきた独創的な知性に魅了される。

暴君だった母親への抵抗と

して小学校さえ出ていない鶴見は独学の人で、東大出で政治家になった上昇志向の塊のような父親に、明治以降近代化を急ぐあまり大量促成栽培された知識人の典型を見る。試験で優秀な成績をおさめ欧米の知識を詰め込んだ秀才が権力の座につける仕組みを作ってしまった。秀才は模範答案を書こうとする。自由主義が流行れば自由主義の、軍国主義が流行れば軍国主義の模範答案を書くような人間が指導者になった。「そういう人間がどんなにくだらないかということが、私が戦争で学んだ大きなことだった」という鶴見の言葉は、そのまま今の日本に当てはまる。(作家)